

感謝してもしまえない感謝の気持ち

工友—かけがえのない仲間たち。

吉永英未

2016年11月

復旦大学で過ごす二度目の誕生日を迎えた。

何気ないふだんの生活の中で、たくさんの数え切れない人に支えられて生きていくことに気づく。その優しさのときに涙することもある。そんな日は、そんな感謝の気持ちを忘れたくなくて、日記に留めておきたいと思う。

図書室の人たちと交流し始めてから一年が経とうとしている。この一年間で、様々な人達と出会った。それは、遠い故郷を離れて上海に出稼ぎにきた人たちと、彼らの力になりたいと願う学生たちだった。

「ここでの」図書室」とは、大学の図書館のことではなく、復旦大学で働く、出稼ぎにきた人たちのために、ボランティア活動をする「校工服務隊」のメンバーが作った図書室のことである。

この図書室は、彼ら工友（ここでは復旦で働く人たちを指す）の住む宿舍の二階にあり、広さは決して広くないが、本棚には本がぎっしりと並べられている。

これらの本は、図書館からいらなくなった本をもらってきたり、学生が寄贈したりしたものである。

（私もいくつかの日本語の本を寄贈した。）工友の仕事は、食堂で料理を作ったり、警備の仕事などをし、オフィスで働くホワイトカラーの仕事とは対照的で、体力仕事のきつい仕事である。

6年ほど前に作られたこの図書室だが、復旦大学での工友支援のボランティアの歴史は浅くはない。また、このように大学で働く工友のために大学内にサークルがあり、ボランティア活動が行われているのは、うちの大学だけではない。

たとえば、復旦は北京大学、清華大学とも「工友服務隊」同士の交流があり、大学内で働く「工友」だけでなく、中国全土の「出稼ぎ労働者」に関心を持ち、フィールドワークを通して調査を行っている。工友と直接交流し、よりの良い環境、待遇を得られるように努力しているのだ。



私たちの大学では、毎日工友が仕事を終えて宿舎に戻ってきたあと、午後8時半から図書室で様々な授業を行っている。たとえば、私は前学期火曜日の夜日本語の授業を担当し、彼らと日本文化を通して交流した。

また、英語学科の学生は英語、国際関係学部 of 学生は政治の授業、そして毎週水曜日は体育として、バドミントンや卓球を工友と共に楽しんでいる。工友は、学生ではないため、大学内の図書館に入ることも、体育館を利用することもできない。私たちは工友が読みたい本を図書館で借りたり、体育館の予約をしたりする。

また、今学期から「中国語講座」も始まった。それは、甘肅省から出稼ぎに来た20歳から30歳の婦人方のために開かれたものである。彼女たちは、20歳を過ぎているが、学校に行ったことがないため、中国語（普通語）を上手く話す事ができない。

また、中国語を書く事も、ペンインを打つこともできない。現在は女の子も学校に行けるようになったが、彼女たちが子供の頃は、そのような文化的背景の中で、女の子は学校に行くことができなかった。彼らは方言を話す（普通語にかなり近いが、やはり発音は異なる。）ため、故郷を離れると、まず言語の壁にぶつかる。漢字を書く事も、ケータイで打つこともできないため、ケータイを使つてのチャットではすべて音声を使ってメッセージを送っている。

また、彼らの働くところはハラム（イスラム教専門の食事）のレストランや食堂のため、周りにも普通語を学ぶ機会がほとんどない。

彼ら回族ムスリムは、ハラムの食事しか食べることができないため、働く場所はかなり限られている。そんな回族の彼らの心は純粹でとても美しい。回族の彼女たちのために、毎週土曜日、学生たちは小学校で教えるようなペンイン（中国語のあいいうえお）から教える。

彼女たちの学ぶ意欲はとても強く、「いつかケータイで漢字を打ってメッセージを送りたい」と意気込んでいる。

そんな工友たちの学ぶ姿をみて、私は、自分の置かれた身とその責任を深々と感じ、更なる努力を誓うのである。



このようなことを述べていると、いつも私たちが工友のために働いているのだという印象を受けるかも知れない。しかし、私たち学生と、工友は、友情の絆と信頼

で結ばれている。先日は同じ年代の工友と学生4人で、深夜1時まで語り合った。そのうちの学生の一人、哲学を学ぶ**李凱旋**は、夏休みに出稼ぎ労働者とともに工場で実際に働いた経験もある復旦大学の修士二年生である。彼は学部を復旦の新聞学部（メディア学部）を出て、マルクス主義に興味を持ち、大学院入学の試験は哲学学院を受験した。彼は夏休み、蘇州の工場で一ヶ月間働いた。自分の身分は隠し、工友たちと共に汗を流した。そんな彼の周りでは、大手企業や金融機関でインターンシップをしたり、海外でPhDを取る学生など少なくなさる。

周りの学生は「君はなんでそんなにたくさん時間を工友のために費やすのか。」と彼に聞く。

あの日の夜、図書室で、彼は私たちに語った。

「僕にはこれしかないんだ。僕は他に何も特技がないし、大学の中でもひとときわ優秀というわけでもない。でも、工友のために少しでも何かできることで、僕にとっては生きがいを感じらる。何より、彼らと過ごす時間が本当に楽しいんだ。」

彼が工友のためにこんなにも時間を割く理由が他の学生たちには理解しづらいかもしれない。でも、私にはその気持ちがわかる気がする。工友はよく、「いつも私たちのためにありがとうね。食堂にご飯食べに来なよ。安くしてあげるから。」という。でも、感謝しているのは、私たち学生たちの方であって、彼らと接することで、人間の暖かみを感じ、図書室にいる事で自分の居場所を見つけることができる。生きがいを感じる事ができているのほかの誰でもない、私たち学生たちなのである。

私には中国のお母さんがいる。北食堂で働く**張麗おばちゃん**である。

張おばちゃんの目は誰よりも優しく、どこか母に似た面影がある。おばちゃんも、私を本当の娘のように可愛がってくれ、食堂で働く他のおじさん、おばさんたちに、「私の本当の娘よ。」と私のことを紹介してくれる。

「もう日本に帰りなさんな。中国人と結婚して中国に残りなさい。あなたが帰ってしまったら、おばちゃんさみしくなるから。」と云ってくれたおばちゃんの言葉に目頭が熱くなった。

母のような暖かさ、本当の娘のように温かく包み込んでくれる張麗おばちゃんは、わたしの中国のお母さんである。復旦の授業を聴講するために、福建省から出稼ぎ



に来た**丁東**、彼は高等教育も受け、もともと受付などの事をしていたが、哲学に興味があり、復旦大学の哲学の授業を聴講するために、大学内でウェイターをして生計を立て、仕事の合間に授業を受けてい

る。復旦は開放的で、ひとつの授業に聴講生がたくさんいる。彼らは他の大学の学生であったり、働いている人たちであったり、復旦の修士課程を受験したい人だったり、様々である。

丁東の哲学の思考力はなんとも言い表せないもので、とにかく彼は、「すごい」。そんな彼と私たちはよく、夜中まで哲学について語りあう。 **姜作鵬** 彼は大学の門を守る警備員で、山東省出身。過去2年間軍隊にいたため、がっちりとした体つきが特長だが、とても優しく、日本が大好きで、私が日本語を教えていたときは一番積極的に発言してくれた。

汪竹君、かっこいい名前だが、女性である。私より4歳年上で、本当にお姉さんの存在。図書室の中では一番仲が良く、なんでも話せる仲だ。復旦付属のホテルで受付をしている。

上記のような工友の他に、6教学楼の向かいの工友宿舎には、たくさんの方友が住んでいる。そして彼らのために、少しでも力になりたいという人たちが集まったのが、私たち**校工服務隊**であり、物理学部、国際関係学部、法律学部、社会工作学部、医学部など学生の出身は様々である。私たちはその特技を活かし、図書室で専門の授業をしたり、映画を放映したりしている。



そんな温かい人たちの集まる図書室は、いつしか私にとって温かい「家」となっていた。いや、大学が、中国は私を温かく見守ってくれていると感じる。自転車がなくなったその日のうちに、私に自転車を譲ってくれた親友。

スカートに穴が開いたとき、何も言わずに縫ってくれた食堂のおばちゃん。一度故郷へ帰ったのに、私たち学生が恋しくなってまた復旦に帰ってきてしまったと言っ南食堂で働くおばちゃん。

そのひとりのひとりの優しさが、私にとっては涙がこぼれるほど嬉しくて、どう感謝したらよいのかわからなくて、ただただ、友情や愛に国籍など関係ないんだと、こころのそこから感じるのである。私が復旦で得たかけがえのないもの、それは、国籍や年齢、学歴や社会的身分を超えた友情であり、信頼関係を築いてきたかけがえのない仲間たちなのである。

そんな私にとって尊い、かけがえのない仲間たちに、感謝の気持ちをこころから伝えたい。

